

申請者: 首藤聡一郎

論文題目 IT導入の際に生じる副次的効果

審査員 加藤俊彦
青島矢一
伊地知寛博

本論文は、大規模な情報処理システムの導入が当該企業にもたらす影響について、業務活動や組織過程を含めた包括的な視点から考察した論文である。ERP(統合業務パッケージ)に代表される情報処理システムは、企業における業務活動の効率化をもたらすと広く考えられている。しかし、システム導入がもたらす影響やそのメカニズムは、これまで必ずしも明らかであったわけではない。特に筆者が注目したのは、新たに導入される情報処理システム自体による業務の効率化などの「直接的」な効果ではなく、システム導入の過程において派生的に生じる業務活動への影響である。情報処理システムによる業務変革が成功する場合には、筆者が「副次的効果」と呼ぶ、後者の影響が少なくなく、場合によっては「直接的効果」をはるかに上回る状況さえ生じる。このような「副次的効果」は実際にどのようなものであり、いかなるメカニズムによって発生しているのか。本論文はこのような問いを中心に展開される。

本論文の前半部分では、この「副次的効果」に関する理論的考察が展開される。当該企業における業務活動に対する認識がシステム導入を契機として変化して、抜本的な業務やコミュニケーションフローの変革につながることによって、多大な「副次的効果」が生じると、筆者は考える。その一連の過程において情報処理システムがもたらす中心的な機能について、筆者は「脱分化装置」、「期待誘発装置」、「焦点化装置」、「ペナルティ増大装置」の4点に整理した上で、独自の視点からそれらの具体的なメカニズムを明らかにしている。さらに、本論文の後半部分では、日本企業2社の事例を中心として、詳細な分析を展開している。

本論文に関して特に評価に値するのは、次の2点である。第一に、業務活動に対する情報処理システムの影響・効果という、実務において近年重要視されながら、必ずしも明確な回答が得られていない問題に対して、精緻な作業を通じて、筆者独自の見解を導出した点にある。特に、システム導入によって間接的にもたらされる影響は、その存在自体は一部で認識されていたものの、学術研究として直接取り上げたものは限られており、当該領域における本論文の貢献は大きいといえる。第二に、事例分析の詳細さである。延べ35名に対する対面調査をベースとした事例は、システム導入過程の深層を浮かび上がらせるものである。

他方、本論文の問題点としては、次の3点を挙げることができる。第一に、筆者は困難とも言える概念的な整理に取り組んでいるものの、完全なものとはなっていない点である。第二に、論文の構成が演繹的な形式をとる一方で、帰納的な推論を基軸としているために、方法論上の齟齬が見受けられる点である。第三に、筆者独自の視点に基づいて議論が展開されている一方で、先行研究との関係が完全には整理されておらず、一般的な本論文の位置づけに不明確な点が存在することである。しかしながら、これらの問題点は本論文の意義を損なうものではなく、筆者の今後の研究活動によって発展的に解決されるものであると考える。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定に準じた取扱により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。